

藤沢久美



誰がための「投信」

ふじさわ・くみ…シンクタンク・ソフィアバンク副代表。国内外の投資運用会社勤務を経て、1996年に日本初の投資信託評価会社を起業。99年同社を世界的格付け会社に売却後、2000年にシンクタンク・ソフィアバンクの設立に参画。現在、副代表。03年社会起業家フォーラム設立、副代表。07年「ヤング・グローバルリーダー」に選出。法政大学大学院客員教授、「金融審議会委員」など公職も多数兼務。著書は『なぜ、御用聞きビジネスが伸びているのか』『投資信託王様』など多数。

く、誰もが幸せになれる投資スタイルへと変わるべきではないだろうか。原油価格が上がると予測されるのであれば、原油価格の上昇を抑える技術開発への投資や代替エネルギーへの投資をすること

先日、マネー誌から投資信託についての取材を受けた。編集者から出た質問は、「オイルも値上がりし始めましたから、商品系への投資がお勧めでしょうか」というものだった。相場観に

もかかわらず、また同じことが繰り返されている感じがして、少々がっかりした。われわれは、投資を通じて相場をつり上げるといふ行為

で、技術開発や代替エネルギーへ追い風を作れば、結果的には中・長期投資にはなるが、投資家は適切な利益を得、社会もその恩恵に浴することになる。

誰もが幸せな投資スタイル

本来の投資とは、そうした産業

基づく投資を全面的に否定するつもりはないが、金融危機を体験し、相場の予測の難しさを実感したばかりであるに

からは、もう卒業するべきではないだろうか。一昨年、原油は1㏇1100㏇を付けた。それは投機マネーの原油市場への流入が原因と言われた。投資信託でもこうした原油

創造や社会創造の原動力であるべきで、企業が存在もまた、そういった投資に支えられながら社会のインベションを担う存在であるべきだ。しかし、こうしたことを言

た。投資信託でもこうした原油などの上昇を見込んだファンドが設定され、人気を博した。投資をした人々は、原油の値上がりによって利益を得ることができたが、社会全体では、原油の値上がりによる物価上昇を招き、多くの人が迷惑を被った。

うと、新興国などこれから成長する国への投資に対して、成長期待で投資をするなどということかという反論をいいたくかもしれないが、それは違う。新興国が中・長期的に経済成長を実現し、そこに住む人々が何らかの形で豊かさを得るのであれば、それは投資を通じて、応援すればいい。

こうした社会への影響を考えず自己中心的に投資をするスタイルは、まさに目先の利益のために、リスクを世界中にばらまいたサブプライム(信用度の低い顧客向け)ローンと同じだ。

要するに、投資をする際に、「この投資は、中・長期的な視点で、誰もが幸せになれるか」ということを自らに問ってみるといふことだと思

金融危機を経た今、自分だけが幸せになる投資ではな

う。